

## 心霊主義とカトリック教会

カルデシズムは19世紀半ばにフランスで生まれた心霊主義で、ブラジルへは成立後、さほど年限を経ずに伝えられた。憑依宗教の一つで、日常的な生活空間である現象界からは通常見ることができない霊界に生きるとされる死霊や守護霊といった、諸霊のメッセージを霊媒師が伝えるところに特徴がある。ブラジルの宗教風土に与えた影響は大きく、日本の新宗教の受容においても重要な役割を果たしている。

ブラジルで心霊主義といえば、奴隷制時代にアフリカから連れてこられた人々の宗教とカトリシズムや先住民の宗教が混淆したアフロ・ブラジリアン宗教が挙げられよう。混淆の度合いは様々で、特にアフリカ色の強いものはカンドンブレ、マクンバ、シャンゴーなど、地域によってさまざまな呼び方がある。アフロ・ブラジリアン宗教には、それらにカルデシズムの影響が加わって、ウンバンダが生まれている。ウンバンダは、先住民系、アフリカ系、ヨーロッパ系という、現在のブラジルのルーツと言える3つの人種の宗教が混成しているため、ブラジル・オリジナルの宗教だとの見方もある。

さて、2010年のブラジル地理統計院の調査によれば、これらの心霊主義を信奉する人々の割合は人口比でわずか2%を超える程度である。さらにアフロ・ブラジリアン宗教の信奉者は心霊主義全体の約15%に過ぎない。とするなら、心霊主義はブラジルの宗教風土にそれほど大きな影響を持っておらず、ましてやアフロ・ブラジリアン宗教などほとんど目立つことがないという印象を与えることになる。しかし、たとえば土曜日の夜、町中を歩いているとアフロ・ブラジリアン宗教の儀礼がどこかで行われていて、リズムカルな太鼓の音が聞こえてくることがある。また儀礼に用いられる祭礼道具の店を都市部の商店街で見かけることは珍しくない。また、カルデシズムについても、どの町でも集会のための拠点がどこにあるかを住人は知っているし、どの書店にも心霊主義の本を置いた棚がある。さらに、ラジオでは教義番組が公然と放送されている。心霊主義はブラジル人の日常生活の中に溶け込んでいるのだが、実質的な受容者・実践者の人数は数字に表れないのである。

人口統計の数値が低いのは、実は心霊主義が「宗教」として理解されにくいからである。それらの拠点に通っている人たちに宗教は何かと尋ねてみると「カトリック」だと答えることが多い。アフロ・ブラジリアン宗教の信奉者は、その実践を問題解決の「方法」、カルデシズムの信奉者は、「哲学」や「科学」、あるいは「道徳」と理解する傾向がある。多くの信奉者にとって心霊主義は特定の苦難から逃れるための「手段」の一つなのである。もちろん、熱心な実践者らはそれらを自分の「宗教」と見做している。日本の新宗教に入信したブラジル人にも類似した傾向を確認することができる。たとえば生長の家ではこのことを逆手にとって「生長の家は人生哲学だ」というアプローチでキリスト教信者の理解を容易にさせている。集会では、壇上に立つ講師が「私はクリスチャンです」と自己紹介する場面に出会うことがある。

ブラジルでは、カトリック教会のミサに出席している約半数

の人びとが輪廻転生を信じているという。カトリック教会の立場では、イエスの再臨によって義人は復活し悪人は永遠の苦しみに入るとされるが、それは決して輪廻転生を説明するものではない。とするならば、「キリストの救いのみわざ」が約半数の「篤信家」たちによって否定されてしまっていることになる。カトリック神父の中にはこの「誤解」が心霊主義によってもたらされたとして批判の矛先をカルデシズムに向ける者がいる。たとえばカルデシズム批判の急先鋒であるクロッペンブルグ神父は、聖書に書かれている「復活」がカルデシズムでは「輪廻転生」に曲解されていると批判する。たしかにカトリック信者だと自認する民衆の宗教生活を精査してみると、こうしたカトリック教会側の批判を無視するわけにはいかないことがわかってくる。先述したように、カトリック信者であることを自認しながらも、病気や経済的な苦難を抱えると、即時的な解決を求めて心霊主義のセンターに通うようになることが一般的に起こっているからである。繰り返しになるが、そのような人々にとって心霊主義は「宗教」でなく救済のための「手段」なのである。

## カルデシズムが移植された時代

カルデシズムが移植された19世紀末から20世紀初頭のブラジルは、政治的には帝政から共和政への移行期にあたる。奴隷制が終わり、政教分離によってカトリックは国教の位置を喪失した。社会・経済的には、砂糖に代わる新たな輸出品としてコーヒーが注目されるようになり、奴隷に代わる労働者としてヨーロッパからの移住者が導入されるようになった。日本からの移民は少し遅れて1908年に始まった。リオデジャネイロなどの都市では奴隷主から解放されながらも、行き場を失った元奴隷たちがスラムを形成するようになっていた。

こうしたなか当時の知識人階層は、ヨーロッパをモデルとして新たな国家建設を目指すようになった。その頃裁定された現在のブラジルの国旗には「秩序と進歩」という言葉が書かれている。その標題はフランスの社会学者オーギュスト・コントによる実証主義の中心テーマにほかならない。「秩序と進歩」とは、ブラジルが新しい国家と国民を創造するために推進した社会認識と社会変革のための近代的なパラダイムだったのである。

ダーウィニズムの社会進化論に裏付けられたその思考法はわれわれにとっても馴染み深いものである。ダーウィンの思想は近代科学の「絶対性」への道を開いたといえるだろうが、それは結果的に「科学」と「宗教」の峻別を招くことになった。「科学」の「宗教」にたいする優越が喧伝されるようになり、宗教によってではなく自然科学によってさまざまな問題が解決できるという「信仰」が生まれた。カルデシズムはこのような社会的・思想的モメントに生まれたといえる。カルデシズムは「科学」と「宗教」の峻別ではなく統合の道を選び、自らを「宗教」であり「科学」であり「道徳」だと規定した。信奉者らは、科学の絶対性を揺るぎないものとして「宗教」のなかに取り込んだ。いや、カルデシズムでは「科学」と「宗教」という二つの要素が当初から疑われもせず互いに不可分なままにあった、と言った方が正しいのかもしれない。